

## 書評『貧困のない世界を創る』

(ムハマド・ユヌス著、猪熊弘子訳、早川書房、2008 年刊行、定価 2,000 円)

笠原 清志

KASAHARA Kiyoshi

本書は、2006 年度ノーベル平和賞受賞者でありグラミン銀行総裁であったムハマド・ユヌスが、人の思いやりと自由市場の力学を融合させ、社会問題を解決する新しい企業形態「ソーシャル・ビジネス」をその壮大な構想と巧みな実践を基礎に情熱豊かに語ったものである。

グラミン銀行や BRAC の活動については、NGO 等が行政や市場とは異なる、あるいはそれを補完するもう一つの公共性を担い、かつしかるべき社会的役割を果たすようになってきたことと関連して論じられることが多い。それは、先進国でさえそのような役割や機能を果たすのは、国や行政だけではないという考え方が浸透してきているからである。しかし、今日では公共性や公共サービスという言葉や概念は、一見無関係に見える事柄を関係付け、ポストモダン論、中間領域論、そして新自由主義に依拠するグローバリズムや金融資本主義批判など多様な議論を可能にする内容を含んでいる。グラミン銀行や BRAC の活動が、NGO や開発援助の分野だけでなく、既存のアカデミックな世界でも注目され活発な議論を引き起こしているのは、以上の意味においてである。

ムハマド・ユヌスが設立したマイクロクレジット組織、グラミン銀行が、バングラデシュの貧しい女性たちの自立を助け人間としての尊厳を取り戻すことに大きく貢献したということは広く指摘されている。彼が2006年のノーベル平和賞を受賞したとき、オスロのノーベル賞委員会は、その受賞理由について次のように述べていた。

「持続的な平和は、大多数の人々が貧困から脱出する道を見出せない限り達成されえない。マイクロクレジットは、その一つの手段である。人々をどん底から立ち上がらせることが、民主主義と人権の前進にも役立つものである。」

マイクロクレジットについては、高い評価の一方で根強い批判も存在している。新たに出てきた批判は、1) 歴史におけるマイクロクレジットの役割についての論評 2) マイクロクレジットの運用についての具体的批判 3) 借り手についての議論といったように三つに分類できる。1) については、マイクロクレジットは歴史的に貯蓄を前提にしている。しかし、現在のようなシステムではまず信用ありきであり、貯蓄と儉約

の必要性という歴史の教訓を無視しているのではないか、ということである。2)、3)については、マイクロクレジットの運用実績を上げるために極貧層には貸与しないメカニズムの存在、あるいはマイクロクレジットが新しい小ビジネスに繋がるのではなく、単なる消費や娘の持参金に充当されるケースが多いことが指摘されている。

しかし、グラミン銀行のマイクロクレジットに対する本質的批判は、地方の農村における極貧層に対しては、マイクロクレジットは実情上、貸与されないし、されたとしても自立支援には繋がらないということである。1980年代末から、グラミン銀行とBRACとのマイクロクレジットに対する評価が違ってきたのは、マイクロクレジットの限界をどのように評価するか、という点であったと思われる。グラミン銀行はマイクロクレジットによる自立支援に楽観的であり、BRACは政府やNGOの包括的貧困対策の中にマイクロクレジットを位置付けようとするのは、この意味においてである。

以上の文脈において、ムハマド・ユヌスはソーシャル・ビジネスという新しいビジネスの形態を志向することによって従来の批判に応え、他方でリーマンショック等に見られる金融資本主義的な市場のあり方を批判している。厳密な定義を避けているが、ソーシャル・ビジネスとは、「其々の国や社会が抱える社会問題をビジネスの手法を持って解決しようとするものである。したがって、損はしないが利益が上がった場合は、株主に配当をせず、ソーシャル・ビジネスの趣旨や社会貢献のために使う。」というものである。このようなソーシャル・ビジネスの形態でスタートしたのが、グラミン・ダノンであり、グラミン・ユニクロである。

本書では、その第二部でグラミン銀行の実験について述べ、組織や活動の形態が「グラミン・1」から「グラミン・2」へ移行していくプロセスが述べられている。グラミン銀行の組織やその実態が、どうしても外部の人に分かりづらいと言われている。それは、この組織が、外部の環境変化に対応して自らを自己変革していく組織であり、他方でまた自らの主体的力量の増大に伴い組織目標を拡大・充実していく組織であり、理念の運動体の部分を有しているからである。このように、グラミン銀行は、学習し、自己変革し、そして組織目標を常に拡大・充実していく組織であるからこそ、単なる貧困層への金貸し業ではなく、貧者の自立と尊厳を回復させることに大きく貢献できたのである。第三部では、「貧困のない世界」と題して、「誰がソーシャル・ビジネスに投資するのか?」、「ビジネスを評価する新しい基準」、「税金と規制の問題」、「ソーシャル・ビジネスと世界の変化」、「ソーシャル・ビジネスとIT革命」、「IT革命と民主主義」、「繁栄の危険」、そして「貧困は博物館に」といったテーマが論じられている。

本書は、グラミン銀行のフェイズ3ともいうべき段階で、ソーシャル・ビジネスという考え方をういて、企業の持っている技術とリソースを利用しグローバルな社会が抱えている課題、例えば、貧困、疾病、教育、環境、エネルギー等の問題を解決しようとしている。そこにおいては、理論的な展開というよりもむしろ理念の表明という域をまだ出ていないと言わざるを得ない。今後、具体的なケースを積み上げることに

よって、ソーシャル・ビジネスの可能性を引き出すことが求められている。その意味において、グラミン・ダノンの成立のきっかけのエピソード、そしてその具体的な展開のプロセスをドキュメンタリータッチで知ることができる本書は、参考になる。従来の著作と同様に、この本の読者は、従来の著作と同様に新しい問題や困難に立ち向かい、無限の創造力をもって解決しようとする彼の勇気と精神力に励まされることであろう。